児童生徒に生きる力を育むための研修の在り方に関する提言

企画調査課　所長補佐兼課長　田中　廣喜　指導主事　小林多津子
指導主事　越智秀三郎　指導主事　吉田　和志
指導主事　横田　政美　指導主事　笹倉　剛
研究員　吉川　昭吉　研究員　稲葉　達雄

要旨

本研究のテーマは、平成８年７月の第15期中央教育審議会の第一次答申や、平成８年８月の兵庫県教育委員会の「子どもたちに生きる力を育む教育懇話会」のまとめを受けて、今取り組まなければならない教育の課題解決に向けて、教員研修の在り方を探ろうと設定したものである。そして、児童生徒に生きる力を育むために、教員としてどのような研修が必要なのかを模索し、そこから教育の今日的課題の解決を図るための講座を設定し、講座の目標・内容さらには運営の仕方等について具体的に提言するものである。これまでの研修のパターンにとらわれず、研修内容や研修方法に工夫改善を試み、研修の目的である教員の資質・能力の向上、教員の意識変革等を目指した研修の在り方を提示した。

はじめに

平成８年７月第15期中央教育審議会は、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の第一次答申を行い、「ゆとり」の中で「生きる力」を育むことを基本におき、学校の教育内容の厳選、家庭や地域社会における教育の充実が必要であるという考え方を示した。

一方、兵庫県教育委員会は、平成８年３月、思春期にある子どもたちの人間関係の在り方を理解するとともに、命を大切にし、生きる力を育む教育を展開するための方向性を探るため、「子どもたちに生きる力を育む教育懇話会」を設置し、平成８年８月末にそのまとめを出した。

折しも、中教審も教育懇話会も、子どもたちに生きる力を育むことが教育における大きな課題であると提言しているのである。

そこで、本研究は、教員に求められている資質・能力の向上や教員の意識変革をめざして、教育の今日的課題の解決に向けた教員研修の在り方について提言するものである。

具体的には、児童生徒に生きる力を育むための教員研修の在り方を模索するために、その課題に対応する研修講座を設定し、研修内容や研修方法に工夫改善を試みようとしたものである。

1　教育における今日的課題

(1) 生きる力を育む

河野重男氏は、「生きる力」とは、困難に打ち勝って疲れない力である。これからの子どもたちはどんな変化に直面するかわからない。どんな困難な状況に直面しても、その課題に敢然とチャレンジし、最後まで課題解決に立ち向かっていく力が必要になってくる。その力が「生きる力」であるという[(1)]。しかし、立ち向かっていく前に疲れてしまっているのが今の子どもたちでもある。

県教育委員会の「子どもたちに生きる力を育む教育懇話会」におけるまとめでは、「自己探求へと導く」「豊かな人間関係づくりを促す」「生きることへの積極的構えを培う」「個が生きる学校教育を創造する」「家庭において子どもとのきずなを深める」「子どもたちの成長に関わっていく社会をつくる」「子どもたちの成長を援助する教師となる」の７章により、「生きる力」を育むための具体的な提言を行っている。

子どもたちに生きる力を育むということは、変化の激しい社会を生き抜く力をつけることである。そのた

めには、この社会の中でどのように生きていくか、人生をどう充実させて生きていくかといったことを、自ら考え、主体的に判断し、行動できる人間を育成することである。そしてそれは、中教審の答申にもあるように、「豊かな人間性と専門的な知識・技術や幅広い教養を基盤とする実践的な指導力」を備えた教員によって、子どもたちに「生きる力」を育むことができるのである。

これからの学校教育の在り方を展望するとき、子どもたちの自立を促したり、他人を思いやる心や人権尊重の精神などを育てたりする教育の実践が求められる。そのためには、教員の資質・能力の向上や、学校教育の転換に向けた教員の意識改革も重要な要素なのである。

(2) 教育の現状

我が国の教育はいかに在るべきかについて考えるとき、まず、今の子どもたちや教員の現状、また、それを取り巻く社会の現状について知る必要がある。

中教審の答申によると、子どもたちの生活の現状として、「ゆとりのない生活」「社会性の不足や倫理観の問題」「自立の遅れ」「健康・体力の問題」「現代の子どもの積極性」「塾通い・受験戦争・いじめ・登校拒否」があげられている。

また、教育懇話会のまとめでは、教員の現状として、「教師は時代とともに変化する子どもたちの気持ちを十分読み取ることができず、また、個々の教師による指導だけでは限界を示している。」「教師は多忙なため生徒が見えるような状況ではなく、自由に生徒と接するための時間的なゆとりがない。相互のふれあいの場ともなる教師と生徒との共同体験の機会もない。」「学校が無力化し、社会から孤立しているのではないか。研修内容や研修方法にしても、社会の変化や子どもたちの変化を踏まえるといった発想の転換が見られない。」などがあげられている。

すなわち、子どもたちは、学歴偏重社会のひずみからか、時間の余裕もなく、体力的にも精神的にもひ弱な子どもが多くなってきている。また、物質的な豊かさの中で、人間としての大切な豊かな心が十分に育っていないのが現状である。

一方、教員の側からみると、教育の理念や理想を求めて教育実践に取り組むにはほど遠い現実の中で、目の前のことに追い立てられ、子どもたちをどのような人間に育てていくのかよりも、知識を教え、その量を評価することを重視してきたといってよい。

これまでの教育の在り方に対する反省と、真に子どもたちにどのような力を身につけさせるかという教育の意義をもう一度見直し、そのために教員はどのように子どもたちに接していかなければならないのかを考えていく必要がある。

教育界をあげて新しい学力観に基づく教育に取り組んでいる現在、子どもたちに、自ら学び自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成することが必要となる。さらに、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性を培うことが、社会の変化に対応し、自分で課題を見つけながら生きていく子どもを育てることになる。

(3) 教育の課題

このような現状をもとにして、学校教育の中で「生きる力」を育むためには、どのような課題に取り組まなければならないのか。

教育の問題は、教員の問題に帰着するといっても過言ではない。指導に当たる教員に優れた人材を確保することの重要性は、これまでにも繰り返し唱えられてきたし、研修所は、教員に十分な研修の場を保証する役割を担わなければならない。

豊かな人間性と専門的な知識・技術や幅広い教養を基盤とする実践的な指導力を培うためには、教員の養成、採用、研修の各段階を通じ、施策の一層の充実を図っていく必要があると、先の中教審の答申の中にもある。

教員の資質・能力の向上には、教科指導や生徒指導、学級経営などの実践的指導力の養成を一層重視することが必要なのである。加えて、教員一人ひとりが子どもの心を理解し、その悩みを受け止めようとする態度を身につけることも極めて重要なことである。また、教員研修で、多様な研修機会を体系的に整備し、教員の社会的視野の拡大のための長期研修や、大学院における現職教育など、さまざまな研修の形態や場を充実する必要もある。

変化の激しい社会を生きるためには、これまでのような知識・理解を重視した「わかる・覚える・できる」

といった教育だけではとうてい対応することはできない。児童生徒が、基礎・基本をしっかり身に付け、自己実現に向けての支援・援助する教育実践が、これからの教育に求められるのである。

これらをふまえて、今日的課題についてまとめてみると、教育する側と教育される側の接点に、激しい社会の変化に対応し、自ら主体的に生きて働く力を身につける人間を、どのようにして育成するのか、という大きな命題が浮かび上がってくる。

そこで、教育の今日的課題を、

①子どもたちの生きる力を育む教育の推進の具体化

②教員の資質・能力の向上を目指す研修の在り方

の2点に集約し、この課題の解決をめざす方策を考えることにした。

2　課題に対応した研修講座

教育の今日的課題の解決を図るために、教員にはさまざまな研修の機会が与えられている。その中で、教員は、自らの実践をもとに試行錯誤を繰り返しながら、教育の在り方を追求していくのである。その重要な鍵を握っているのが、教員研修である。

教員研修は、一人一人の子どもの人間としての成長・発達を促すことを究極のねらいとして行う内省的活動である。教員自らが、実践を通しながらその力量を高めていく一方で、研修を通じて教育実践の在り方を見直し、教育の今日的課題の解決に取り組む力量を再構築するのである。

そこで、先に述べた2つの教育の今日的課題の解決を目指して、「生きる力を育む教育講座」「自己表現力を伸ばす講座　－ディベートで討議力を高める－」「学校図書館活用講座」「カウンセリングマインドに基づく学級経営講座　－人間の生き方在り方を考える－」という4つの研修講座を設定した。

子どもに変容を促すためには、教員自らの変容が求められるといわれるが、理論と実践の一体化をめざした研修が行われてこそ、研修の意義も見いだされるものである。ここに掲げる研修講座は、単なる技能修得型の研修ではなく、課題として掲げた教員の資質・能力の向上や意識変革にせまる研修内容を設定するとともに、子どもたちに生きる力を育むという今日的教育課題の解決に取り組んでみようと試みたものである。

「生きる力を育む教育講座」は、子どもたちに生きる力を育むために、教員にとって必要な指導力は何かを追求し、それにふさわしい実践方法を見つけだすという講座である。

国際化、情報化の時代にあって、子どもたちに、自分の思いや考えを自由に表現できる力を身に付けさせることが求められている。しかし、これまでの教育の中では、このような訓練がなされないままに学校を卒業してしまうという現状がある。そこで、「自己表現力を伸ばす講座　－ディベートで討議力を高める－」では、討議力に焦点をしぼって、自己表現力を伸ばすための方策を、実習しながら習得していこうとする講座である。

読書離れの子どもたちが増加しつつある今日、学校図書館の充実が叫ばれている。「学校図書館活用講座」は、学校図書館の新たな活用方法を、自ら学び、考える力を育てるという観点から模索し、演習、実習を通して研修する講座である。

「カウンセリングマインドに基づく学級経営講座　－人間の生き方在り方を考える－」は、児童生徒とのかかわり方の基本を、カウンセリングマインドに置いて、学級経営を行う際に必要なものは何かを、実習や演習を通して研修する講座である。

これら4つの講座については、これまでの研修パターンにとらわれず、研修内容や研修方法に工夫改善を試み、「児童生徒に生きる力を育む」ことを講座共通の大きなねらいとして位置づけ、企画編成している。そして、講座の目標、講座内容の意図、運営上の留意点、日程、この研修によって培われる教員の資質・能力、意識改革等について、具体的に提示し、受講者自らが「求める・学ぶ・考える」研修になるようにした。

(1) 生きる力を育む教育講座

① 講座の目標

教育の今日的課題に対応するために、人間の生き方在り方について研究し、児童生徒に生き方を考えさせ、学ばせるための教育実践方法を編み出し、生きる力を育む教育の推進を図ることを目標に、1泊2日で3回実施する講座である。

② 講座内容の意図

児童生徒の変容を目指すためには、教員自ら変容しなければならないと言われる。この講座は、教員の変容を促すためのもので、次のような5つのステップを設定し、それぞれにおいて、受講者が自ら考え、自らの変容を目指して研究を進め、結論を導き出すものである。

ステップ1：「子どもの現状を知る」

児童生徒の実態及び現状把握を通して、なぜ今、子どもたちに生きる力が必要なのかという課題意識を持ち、生きる力を育むことの必要性を、受講者相互で共通理解し、研究の足がかりにしていく。

ステップ2：「生きる力について考察し、研究テーマを設定する。」

生きる力について分析し、生きる力を育むためにはどのような課題に取り組まなければならないかを、受講者の校種別に、発達段階に沿って研究テーマを設定していく。

ステップ3：「生きる力について認識を深め、実践に結びつけるための資料収集を行う。」

ただ単に「生きる力」といっても、漠然としたものであり、とらえ所のないものである。多くの情報を収集することは、研究を深めるためにも必要なことである。そこで、「生きる力」に結びつくさまざまなファクターを抽出し、研究の柱づくりをする。

ステップ4：「研究を深化させる。」

理論研究や実践を通して浮かんでくる課題解決に向かって、さらに研究を深め、具体的な学習内容や実践方法を編み出す。

ステップ5：「実践力を高める教育方法を提示する。」

研究の成果をまとめ、生きる力を育むための実践力をつける教育方法等を提示する。そして、生き方を考え、生き方を学ぶ教育の推進を図る具体的なカリキュラムを構築する。

こうした5つのステップを踏みながら、21世紀にたくましく生きる児童生徒の育成に寄与する研究講座を編成し、運営していく。

③ 講座運営上の留意点

講座の運営にあたっては、次の4点に留意しながら推進する。

ア 受講者の意識の高揚

・自分の取り組もうとする研究課題について模索し、整理していく力の育成

・児童生徒を観察する力、洞察力の育成

イ 理論研究

・児童心理、教育方法、教育実践等についての研究

・学習内容、指導方法の研究

・文献や講義、演習、ワークショップ、実践発表等を通しての理論の深化

ウ 研究方法の提示

・研究を進める手順の指導、助言

・研究テーマの設定、研究の深め方、まとめ方等についての指導、助言

エ カリキュラムの作成及び実践方法の提示

・学習内容、学習方法を含め、実践可能な「生きる力を育む教育」の推進をめざすカリキュラムの作成

④ 日程（研修内容）

	形　態	内　　容
第1	講義 講義・演習	［子どもの現状を知る。］ 生きる力を育む教育 －いま、なぜ生きる力なのか－ 児童生徒の実態及び現状把握 －心理学的に見た小・中・高校生－
		［生きる力について考察し、研究テーマを設定する。］

回	演習 協議 演習・発表	生きる力って何？－ＫＪ法等による分析－ パネル・ディスカッション　生きる力を育てるために －どんな力が必要なのか－ 研究テーマの設定 －生きる力を育むために取り組む課題－
第2回	講義・演習	［生きる力について認識を深め、実践に結びつけるための資料収集を行う。］ ワークショップ テーマ例 ・性と生と死の教育 ・いじめ・不登校の問題 ・人権教育（子どもの権利条約） ・教育の基礎基本 ・進路指導 ・共に生きる社会（人と人、人と自然、人ともの）
	発表・協議 研究	［研究を深化させる。］ 中間発表（実践報告）－研究の実際と実践報告－ 今後の研究の方向づけ －課題の明確化と研究の方向－
第3回	発表・協議	［実践発表をする。］ 研究報告 －研究の実際と実践報告－
	まとめ	［実践力を高める教育方法を提示する。］ 研究のまとめ －生きる力を育む教育の推進をめざして－

⑤方法と技法

ア　導入

発達段階における児童生徒の心理状態について把握する。そこでは、児童生徒の実態把握をするための方法や、その実態に照らし、児童生徒が今培わなければならない能力等について明確にするための講義や演習を取り入れる。

イ　テーマ設定

自分の研究テーマを決めるための手がかりをつかむために、「生きる力」について、ＫＪ法等を使って分析していく。そして、児童生徒にどのような力を培うことが必要なのかを明確にし、適切なテーマを設定していく。

ウ　研究の深化

実践に向けての方向性を見い出し、各研究テーマに基づいて、学校で実践に取り組む。それをもとに、試行錯誤を繰り返しながら、課題を明確にして次回の講座に臨む。

エ　資料収集

資料収集の１つとして、ワークショップを開く。そこで自分のテーマについて研究を深めたり、さらに文献等の資料収集にも取り組む。

オ　中間発表・実践発表

各学校で実践してきたことをもとに、受講者が発表し、協議を深めたり、相互に助言したりしながら、課題をより明確にし、実践方法を生み出すための方向を探っていく。

カ　まとめ

生きる力を育む教育の推進方法を確立し、学校で実践していくための具体的なカリキュラムをつくる。ここでは、取り組んできたことを発表する場で、実践的研究の発表会になる。

また、実践しながら新たな課題に直面したことや、研究の成果が実証されたことなど、発表と併せて、１研究10ページぐらいにまとめて、研究冊子をつくり、講座の成果とする。

研究の成果については、県内にとどまらず、研究会等の研究発表大会で発表する場を設定する。

(2) 自己表現力を伸ばす講座

－ディベートで討議力を高める－

① 講座の目標

自己表現とは、自分の感情や意思、あるいは思考した内容等を、表情や態度、言葉、その他の手段によって表出することである。

そのうち、自分の意思を明確な論理と言葉で表現する力を育成することが、教育の現代的課題となっている。というのは、来るべき21世紀は従来の均質な社会ではなく、多様な人間の同居する国際化社会であり、そこでは自分の意思を明確に伝えつつ、相手と意見を戦わせて、よりよい一致点を生み出す力が求められているからである。

第15期中教審の第一次答申でも、育成すべき６つの資質・能力の中に、

・「国語により適切に表現する能力と的確に理解する能力」

・「論理的思考力や科学的思考力」

があげられている。

これらの力を培うためには、学校教育の中で、討論や討議の場を積極的に設けて指導していくことが最も有効な教育方法の一つと考える。

そこで、この講座では、教員自身が討議とりわけディベートを経験することによって、討議に関する指導力と技術を向上させることをめざしている。

児童生徒たちの間では、討論がなかなか成立しない状況にあるが、教員自身がまず経験することによって、討議の緊張感や面白さを実感し、指導の理論やノウハウ、指導計画を立てられる力量を身につけることが、本講座の目標である。

② 講座内容の意図

本講座の内容を編成するに当たって意図したものをいくつか掲げてみる。このうち、生徒と同じ過程をたどるイの体験は、学校で実際に指導する場合に有効であろうと思われる。

ア 有効な討議法の理解

小・中・高等学校で行うことのできる討議法はいくつかあるが、最も有効と思われるディベートとパネル・ディスカッション、さらに当研修所で指導しているパネル・ディベートを取り上げて、その特長について理解を深める。

イ 学習過程の体験

学校で実施するディベートは、討議だけが成立すればよいのではない。丁寧な事前指導や事後指導もまた必要である。それらを含めた過程として、

a 情報の収集・加工（事前）

b ディベート（討議）

c 判定・評価（事後）

の３過程に分けることができるが、この講座では児童生徒の学習過程を受講者自身が体験することで、指導の参考となるようにした。

ウ モデル例の作成

自分たちの体験したディベートをもとに、小・中・高等学校の校種別に分かれて、それぞれ児童生徒の実態に合うテーマや形式、進行手順、判定表を工夫し、さらにモデルとなるべき事例を創作する。

エ 指導技術の獲得

ディベート指導に関して、事前指導から実際の進行、評価の仕方に至るまで学校でのさまざまなノウハウを小・中・高等学校の教員が発表し、受講者との協議で深めていく。

③ 講座運営上の留意点

ア 自主性・自発性の尊重

ガイダンスを行った後は、できるだけ受講者の自発性に委ねる。むろん、資料収集のために図書室を開放し、協議のために研修室を確保するなど学習環境への配慮を行い、必要に応じて助言する体制をとる必要がある。

資料収集に関しては、図書室の利用にとどまらず、時代に即して、インターネット等の利用も考えられる。

イ フレキシブルな時間の確保

充実した実習とするために、講座中にも随時、班別協議や作業のための時間を配置する。受講者が自由に使えるフレキシブルな時間を確保しておく必要がある。

ウ 映像教材の活用

ガイダンスでビデオなどの映像教材を使用して説明すると受講者の理解が早いので積極的に活用したい。自分たちの討議風景も録画しておき、事後指導に活用する。また、そのビデオは希望者に分け与え、学校で児童生徒に指導する際の教材の一つとする。

④　講座の日程

	形　態	内　　容
第1日	講　義	児童生徒の討議力を高めるために －ディベートとパネル・ディスカッションを中心に－
	講義・実習	ディベートをどう指導するか －基礎理論から模擬ディベートまで－
	実習	ディベート実習①　－情報を収集・加工する－
第2日	実習	ディベート実習②　－ディベートで論戦する－
	実習	ディベート実習③　－判定・評価を行う－
	協議	モデル・ディベートを創る①　－テーマ・形式・進行・判定など－
第3日	協議・発表	モデル・ディベートを創る②　－展開モデルを発表する－
	発表・協議	教室でディベートを実施するには　－私の指導法と評価の工夫－

⑤　ディベート　－その方法及び技法の説明－

ア　ディベートでどのような力を育てるか

ディベートに係わる諸活動を通じて、子どもたちに対して、時代・社会への関心、情報収集・整理能力、論理的思考力、討論する力、聞く力の５つの力を育てることができると考える。

イ　ディベートとは何か

ディベートは従来の討論とは違い、討議を進めるために明確なルールをもっている。その特徴は次のとおりである。

a「一つのテーマ」をめぐって、

b「相対する２組」の間で、

c「一定のルール」に従って討論し、

d「最後に勝敗が下される。」

このうち、cの「一定のルール」は、機会均等・交替主義と時間制限主義の二つの原則の上に成立しており、進行方法はかなりマニュアル化されている。

また、b「相対する２組」に分かれて討議する点と、討議後に判定を行いd「勝敗を下す」点が、他の討議方法とは大きく異なるところである。

これによって、議論を論点からはずさずに集中させることができ、また相手に勝とうとして緊迫した議論にすることができる。

ウ　どのようなテーマで行うか

いくつか例をあげてみる。これらの中から受講者に選択させるのがよいだろう。

a　社会に関するテーマ

・自販機は廃止すべきである。

・外来語は日本語を豊かにする。

b　教育に関するテーマ

・小学校に英語教育を導入すべきである。

・高校生のアルバイトを認めるべきである。

エ　どのような形式で行うか

a 簡略型（立論、反対尋問）

b 標準型（立論、反対尋問、最終弁論）

c 自由討論型（立論、反対尋問、自由討論）

⑥　その他

今後、学校では、さまざまな学習活動の中で「情報の収集・加工」が重要になると思われる。

どこで、どのようにして情報を収集するか、集めた資料をどのように整理し活用するかに関して、有効な方法の開発が今後の課題である。

また、児童生徒の発達段階に応じた指導計画の立案とそれによる実践例を収集することが、ディベートを中心とした討議法の普及に貢献すると思われる。

(3) 学校図書館活用講座

① 講座の目標

従来の読書指導を中心とした学校図書館の役割は、今日の情報化の進展のなかで、大きく変貌を遂げつつある。さらに「生きる力」を育むという観点からもその役割を考える必要がある。

すなわち、社会の変化のなかで、学習の拠点としての学校図書館を再認識することである。

今日的な役割を列挙すると、

ア 情報蓄積の拠点

文学書から情報の蓄積へという学校図書館の変化は、国語科の読書指導にとどまっていた学校図書館の役割を、全教科への活用、さらに特別活動における活用へと展開をみせたことである。共通の課題を各教科で対応するという、課題学習が強く主張されてきた今日においても、その役割はなおさら重要となる。

すなわち、データベース機能としての学校図書館の見直しであり、とりわけ、情報蓄積の拠点としての学校図書館を再考していくことが大きなポイントとなる。

イ 自己教育力の育成

アと相まって、自ら考え判断するという自己教育力の育成、すなわち「生きる力」を育むものとして、学校図書館ほど適したところはない。適切な自学・自習の設定が自己教育力の育成には必要である。学校図書館は、資料の活用・思索・判断・発表といった要素のある活動に威力を発揮することになる。

ウ 学習の場所

学習をいわゆる教室に限定する必要はない。ア、イが内実とするなら、これは場所として、環境としての図書館の再認識である。この場合、図書館の単独利用さらに教室とのリンクも考えられる。図書館を授業展開の一場面とする考え方は、放課後のたまり場になろうとする図書館を再生することでもある。

情報教育の進展にともなう、図書館内の充実にも留意する必要もあろう。活字のみならず、視聴覚全般におけるメディアやデジタルメディアも含まれてくる。それにより、学習の場所としての図書館の意味合いは大幅に増大してくる。

こうした学校図書館の役割の変化に即応した講座の編成が急務となってくる。

新しい学校図書館の活用の提示は、学校の活性化・授業の活性化にも通ずる。

② 講座内容の意図

ア 活用の新奇さ

今日的な課題に適応したものであり、さらに受講者自ら考え、実感することを主眼とする新しい学校図書館の活用をめざす。

イ 具体的な提示

小・中・高等学校における、教科・課題学習等への対応を学習内容・学習形態の面から具体的に提示していくことになる。

ウ グループ構成の弾力化

フレキシブル・グループ[(2)]による受講者自らのテーマ設定によって演習・協議を進めていく。さらにそれぞれのグループで演習・協議することによって、他のグループの提示内容は非常に参考になるし、新しい発見にもつながる。

③ 講座運営上の留意点

ア 受講者によるテーマ設定

新しい学校図書館の活用ということに焦点化し、そのために、受講者自らによるテーマ設定を重視する。

イ 研修所の図書館の活用

研修所の図書館を学校図書館とみなしていく。研修所の図書館を活用することによって、学校図書館活用の見直しが実感されよう。

ウ フレキシブル性の重視

テーマとグループのフレキシブル性を重視することによって進める。大枠のテーマだけを示し、内実は演習・協議によるグループ内討議によって進められる。

④ 講座の日程

	形　態	内　　容
第1日	講　義	学校図書館を再考する
	協　議	学校図書館の新しい活用法 （全体協議） 観点 {学習内容 学習形態 メディアセンターとして}
	演　習	活用法の検討のための資料収集等準備
第2日	演習・協議	グループによる活用法の検討（図書館にて） （フレキシブル・グループ） 具体例 {教科での活用 課題教育での活用 課題研究での活用 習熟度別指導・個別指導での活用 特別活動での活用}
	協　議	発表 （グループごと） まとめ
	実　習	実際の具体的活用の実習

⑤ 方法及び技法の説明

ア　グループによる研修

（フレキシブル・グループの構成）

1日目の全体協議において、活用についての大枠のテーマを提示する。2日目のグループによる研修は大枠のテーマのもとに、テーマの下位方向への拡大にともないグループを構成していく。人数は不定の、フレキシブルなグループ構成で、受講者の興味あるサブテーマによる検討がなされることになる。

イ　フリー研修

研究の方法についてはグループに任せる。多くの資料を有している図書館において、演習・協議を多用する研修であり、これによってさらに活用の広がりのなかでの具体例の提示がなされる。

興味あるテーマによって、自己教育力の育成を先行体験するものである。

(4) カウンセリングマインドに基づく学級経営講座
－人間の生き方在り方を考える－

① 講座の目標

学級経営とは、学校、学年経営を踏まえて、学級担任の教育理念を基にした学級経営観によって、企画・運営していく全ての教育活動である。昨今の教育事情は、いじめ・登校拒否等多くの課題を目の当たりにして、学級担任の悩みも日毎に増しているといっても過言ではない。

児童生徒に生きる力をつけることが、今クローズアップされてきた。児童生徒に生き方在り方を考えさせ、生きる力を育むためには、教員に児童生徒を見る目と共感的理解のできるクラスにしていく経営力が求められているのである。

そこで、教員自身の力量を高めることはもちろん、児童生徒とのかかわり方について等の研修を深めることを本講座の目標とした。

② 講座の意図

児童生徒に生き方在り方を考えさせ、生きる力を育むための学級経営を考えるにあたり、モノの豊かさのなかで育ってきた現代人にとって、何が必要かを考えたとき、第1にあげられるのが体験である。そこで、体験を通して児童生徒自らの変容と、教員のかかわり方の2点を大きなポイントとして考えた。

ア 体験活動の重視

昨今の児童生徒は体験が不足しているとよく言われる。与えられることが多く、自ら考え、行動するという機会が少ないのである。そのために、物事に感動するという経験も少ない。そこで、できるだけ多くの体験をさせることによって、感動を味わわせることも教育の中では大きな要素となる。

そのためには、指導者である教員自身がさまざまな体験活動を通して、感動の体験を味わうことが必要である。教員の感動体験なくして、子どもに感動の場を設定することは不可能である。

そのために、教員自ら、ものを作ったり、身体を動かしたりしながら、創ることの喜びや感動を実感し、それをもとに児童生徒とのかかわり方を考えていくことが必要なのである。

イ カウンセリングマインドの理解

学級経営においては、どのような学級にするか、どのような児童生徒に育てるかといった理念を追求することは、これまでにもさまざまな取組や研究がなされている。

この講座は、児童生徒へのかかわり方をどのようにするかというカウンセリングマインドを中心とした内容を取り入れ、教員のかかわり方、学級経営の仕方等を、体験を通して考えていくものである。

③ 講座運営上の留意点

ア 自主運営

全スケジュールを大きな枠組みでとらえ、充分な時間を与えて、自主的に運営させる。そして、決まった答えを引き出すのではなく、受講者が自ら考え、主体的に取り組んでいけるよう、あくまでも支援・援助者であることが担当者である指導主事に求められることである。

イ 体験内容や場所の設定

体験内容や場所を豊富に準備し、受講者の主体的な活動を促す。その際、その体験内容や場所は、各受講者に取捨選択させるが、児童生徒に感動させることができるものであるという判断の上で、各自選択するという前提でなければならない。

ウ カウンセリングマインドの習得

理論や技法の習得を主たる目的にするのではなく、教員がどのような態度で、児童生徒の前に立つべきかといった、教員としての備えておかなければならない資質・能力の一環として、カウンセリングマインドを習得することが大切になる。

エ 学級経営実践力をつける

講義・演習・体験等を通して、自ら学級経営の在り方について考え、各自の学級経営実践力を培うための適切なアドバイスのできる力量をつけておく必要がある。

④ 講座の日程

	形　態	内　　容
第1日	講　義 実践発表 実　習	一人一人を生かすとは －子どもの体験活動は何を意味するのか－ 私の学級づくり 体験活動その1 －竹細工等の工芸品の制作－ 体験活動その2 －加工食品（パン・うどん等）づくり
第2日	実　習 演　習	体験活動その3 －勤労・奉仕・福祉等の体験－ 体験活動のまとめ －児童生徒に必要な力とは－
第3日	講義実習 講義実習 発表協議	児童生徒理解のためのカウンセリングの理論と技法 －体験活動を通して学ぶ－ 体験活動を通して集団意識を高めるために －一人ひとりを大切にする集団－ 体験活動を通して自己実現を目指す学級経営 －児童生徒が生き生きとする学級－

⑤ 方法及び技法

ア 体験活動

個人やグループに分かれ、専門家の指導等を受けながら、自ら方法を考え、独創性・想像力等を働かせ、試行しながら作品を作る。また、勤労・奉仕活動では、今まで気にも止めていなかった些細な事柄に目をとめ、新たな体験に汗を流し、勤労の充実感を味わう。

福祉を受ける立場の人と接することにより、懸命に生きている姿に触れ、人間の尊厳性、生きる喜びを実感として味わう。

体験としては、教員が日頃あまり体験することのない業種（農業・林業・畜産等）も含め可能な限り多方面にわたり体験する。また、福祉活動等も取り入れ、人間の生き方在り方についても考える場を提供する。

イ 講義・協議・演習

受講者自らの体験やカウンセリング的なかかわり方の研修を経て、児童生徒一人ひとりが存在感を感じるクラス経営の基本について学ぶ。

⑥その他

「感動は心の扉を開く」といわれている。カウンセリングマインドとして必要なことは、感動する体験をできるだけ多く持つことであろう。そうすることによって児童生徒は自分らしさを身につけ、いきいきと輝くのである。生きる力を育むため、教員としてどのように子どもとかかわればよいのかを、自ら実体験することを通して、教員としての意識を変革することが可能である。

児童生徒が自分らしさを身に付け、自分という存在感を感じるクラスとはどのようなものかを、さまざまな活動を通して自分なりにまとめ、さらに、カウンセリング的な手法を学ぶことにより、学級経営力を高めていくことにつながると考えている。

3　成果と課題

児童生徒に生きる力を育むための研修講座の具体例を4つ提示した。このうち、「生きる力を育む教育講座」と「自己表現力を伸ばす講座　－ディベートで討議力を高める－」は、平成9年度に当研修所で実施するまでに至った講座である。

「学校図書館活用講座」「カウンセリングマインドに基づく学級経営講座　－人間の生き方在り方を考える－」は、今後できるだけ近い時期に取り組まなければならないものとして取り上げたものである。

先に述べたように、生きる力とは生き抜く力であり、社会の中でどのように生き、人生をどう充実させていくかということを、自分で考え、主体的に判断し、行動できる人間になることである。

ここに提示した講座は、そのような大きな目標を設定した上で、今教育に必要なものは何かということを念頭において立案したものである。研修講座の既成概念を取り払い、全く観点を変えて立案したもので、受講者の主体的な活動（実習、演習、体験等）を前面に出し、型にはまった研修ではなく、フレキシブルな研修で、受講者自らが創り出し、運営していくといった講座の編成になっている。研修講座を受講することによって、教員の中に、子どもたちに生きる力を育むことについての認識が高まればという思いの中で計画したものである。

しかし、教育の今日的課題として掲げた、①子どもたちの生きる力を育む教育の推進の具体化、②教員の資質・能力の向上を目指す研修の在り方、の解決に向けての方策を考えることは、容易ではない。

研修所における役割の中で、教員の固定観念からの脱却、視野の拡大、専門性の深化等々、取り組まなければならないことはたくさんある。その中の一つでも解決の糸口を見つけようと、このような講座を企画編成し、実際に取り組んでみようとしたのである。

講座の運営にあたっては、受講者の講座に対する意欲や意識が大きく影響するが、講座の目標を達成するために、さまざまな方法で取り組んでいくことが大切なのである。実際は、同じ講座でも、担当者によって進め方や内容が違ってくるという現実がある。それは講座に対する認識の違いであると考えている。

しかし、目指す方向が同じであれば、方法や内容は違っていても、講座の意図は十分に反映されるはずである。要するに、講座に携わるものの共通理解が十分にでき、その講座に対する認識が十分行われなければならないということである。

ここに掲げた講座の成果は、今後の取組の中で明らかになってくるであろうが、これらの講座は、現時点では、あくまでも計画であり、実践を通してさらなる課題が浮かび上がってくることは言を俟たない。実践を積み重ねながら、研修の本来的目標に近づくようにしたいものである。

おわりに

当研修所企画調査課の共同研究は、これまで研修（究）所の在り方という大きな枠組みのなかで、研修の在り方について考えてきた。平成8年度は、教育の今日的課題に基づいて、研修講座の内容を提示し、さらには運営の仕方、留意点をも具体的に述べ、研修講座そのものを企画編成した。

教員の意識の変革や資質・能力の向上は、研修所の大きな役割である。これまでともすれば、研修の枠をつくることに終始してきた当研修所企画調査課が、研修の中身にまで入り込み、研修講座の実際を想定しながら、講座を企画立案したことは、研修所としての既成概念を打ち破ることにもつながるのではないかと考えている。

今後も教員の資質の向上、指導力の向上という大きな目標に向かい、教育に対する意識の変革に取り組みたいと考えている。

注

(1) 日本教育新聞関西支社・人間教育研究協議会編『生きる力と21世紀の教育　教育セミナー関西'96収録集』日本教育新聞 1996　より

(2) テーマの下位方向への移行にともない、生み出されるグループをさす

参考文献

・第15期中央教育審議会第一次答申　文部省　1996

・子どもたちに生きる力を育む教育懇話会まとめ　兵庫県教育委員会　1996